

口腔病原体が誘う 死のスパイラル

大阪市立大学大学院医学研究科細菌学分野准教授
松本壮吉



A5判/240頁
定価 3,570円
(本体 3,400円+税 5%)
医歯薬出版刊
(2012年1月発行)

歯科衛生士が対象とする口腔は、腸管と並んであまたの微生物が寄生している生体器官である。唾液中1 mLやプラーク1 mgには約1億の細菌が認められるという。口腔の二大疾患は、齲蝕と歯周病であるが、前者はミュータンスレンサ球菌、後者はポリフィロモナス菌をはじめとする細菌集団により生じる“感染症”である。本書は、この二大口腔疾患に加え、口腔微生物が脳梗塞、心筋梗塞、動脈硬化、肺炎、糖尿病など、現代日本人を悩ませる重篤な全身疾患にかかわっていることを“死へのスパイラル”として詳細に記載・紹介したものである。

本書は、一般のマニュアル的書籍と一線を画している。それは、口腔病原体が循環器疾患・肺炎・糖尿病などの個体の死を招来する過程を、病原微生物学に加え、免疫学、循環器内科学、呼吸器内科学などの深く横断的な知識をもとに、著者が理論的に再構築を行い、われわれ読者に強い説得力で示してくれることである。本書で紹介される事象のバックグラウンドには、必ず理論的な裏づけがなされており、それは分子レベルに及んでいる。

冒頭部には、本書が口腔病原体が最終的に死のスパイラルに誘うさまを記載することを

暗示するが、まずは、生命現象の根源となるDNAの構造を落語的ユーモアを交えて述べ、さらに読み進めると、生体の病原体に対する防御反応を、「炎症—自然免疫—獲得免疫—炎症への回帰」であると解説する。さらには病原体が巧妙に生体に寄生したときに病気を起こすメカニズムをわかりやすく紹介し、最後に、口腔病原体がいかんにして重篤な全身疾患にかかわるのかを、赤裸々にしていく。それまでに紹介してきた生命現象と感染症のメカニズムをベースに、小川が大河となるような理論的な爽快さで語られ、圧巻である。

本書を拝読し、私はAppleの創始者であるスティーブ・ジョブズがスタンフォード大学で行ったスピーチを思い起こした。それは過去に振り返って点（経験）を結ぶというものだ。ジョブズは、「未来を俯瞰して、点（経験）を計画することは難しいが、過去を振り返って点をつなぐことができる」と説いた。その点は、その人しか体験できない。本書の著者は、若き日に医学分野で感染症に関する先端の基礎研究を行った後、歯学部口腔細菌学で教鞭をとることになった。また、退官後は一医師として現場で医療に従事している。本書は、まさに著者の経験した点がつながって結実しており、著者ゆえに著しえた貴重な内容となっている。

本書に多数収載されている分子間相関を示す参考図は、横断的かつ深い知識が詰め込まれており、それをじっくりと時間をかけて眺め理解することはとても味わい深い。私は、本書を、歯科衛生士はもちろん、臨床の現場にて働く医療人をはじめ、病気の成り立ちを学ぶ医学生や歯学生等にも自信をもってお勧めしたい。